



リーキ(ヒガンバナ科ネギ属)

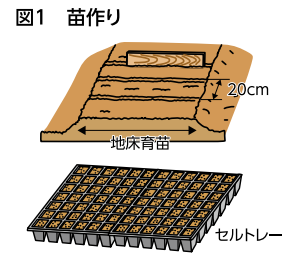
西洋ネギともいわれ、フランス料理ではポアローとの呼び名でシチューや肉の付け合わせに利用されます。土寄せした太く白い部分(軟白)は外観的には「下仁田ネギ」に似ていますが、葉ははかまつに両側に重なって付きます。煮込んでも煮崩れせず、歯切れが良く甘味と香りがあります。なお、若取りしたリーキはポワロジエヌ又といい、柔らかくで生食もできます。

【栽培時期】 根深ネギと似た作り方で、春彼岸ごろに種をまき、夏に苗を植え付け、冬に収穫する春まき栽培が一般的です。根深ネギより栽培期間が長くかかります。

【品種】 「ポワロ」(タキイ種苗)、「ポトフ・ルフレ」(渡辺農事)などが、茎葉が太く寒さに強い品種です。

【苗作り】 地床では、1平方m当たり化成肥料(NPK各成分10%)を100g、苦土石灰100gくらいを散布し、畝幅100cm程度の栽培床を作りま

す。畝の方向と直角に20cm間隔に、厚さ1cmく



の溝を作り、株間1cm間隔に種まきします。セルトレーでは育苗用土を使い、128穴トレーなどに1セル当たり2、3粒まきます(図1)。その後、本葉3、4枚までに株間2、3cm(セルトレーでは1本立ち)に間引きします。

【畑の準備】 元肥は事前に1平方m当たり苦土石灰200g程度を散布し、その後完熟堆肥1kgと

化成肥料150gを施用します。畝幅は90cm程度、植え付け溝は深さ20cm、幅15cmに掘り下げます(図2)。

【植え付け】 中間地では5、6月が植え付け期となります。草丈7、8cm、鉛筆程度の太さの苗を、はかまつに開く葉を畝の直角方向にし、およそ10cm間隔で溝に立てます。根元に少し土をかけ、その上にわらや腐葉土を5〜10cmの厚さに入れます(図3)。

【追肥・土寄せ】 秋口から3、4回、1カ月ごとに株元に畝1m当たり化成肥料50gをまいて長ネギのように土寄せ(軟白)をします。このとき、葉と葉の間に土が入らないように丁寧に行います(図4)。

【病害虫の予防】 リーキは農薬取締法では「ねぎ」に含まれ、ねぎに使える農薬を利用できます。特に、軟腐病やハモグリバエ、アザミウマに注意します。軟腐病にはZボルドーなど、ハモグリバエ、アザミウマにはベニカ水溶剤などの登録農薬を使用基準に従って散布します。

【収穫】 茎の太さが3〜5cm、軟白長が20cm以上になれば収穫ができます(図5)。

※関東南部以西の平たん地を基準に記事を作成しています。

図4 追肥・土寄せ

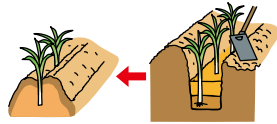


図3 植え付け



図2 畑の準備

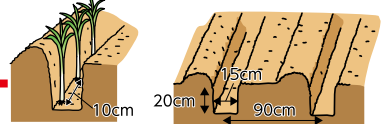
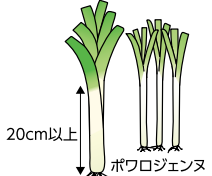


図5 収穫



栽培計画	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
春まき栽培			○				●				●	
秋まき栽培					●				○		●	

○ 種まき ● 植えつけ ● 収穫



JAグリーン津店がリーキ栽培のポイントを教えます!



JAグリーン津店 グリーンアドバイザー認定 城博一

茎の白い部分は柔らかく甘味があり、ねぎ特有の刺激臭もほとんどありません。生でも食べられますが、加熱調理をすることでより甘味が引き立ちます。日本のねぎより香りがマイルドで、ビタミン(B6・K・C)葉酸といった栄養たっぷりの野菜です。

《間引き》

リーキの間引きはタイミングよく行いましょう。間引きの時期が早すぎると苗が徒長して軟弱になり、遅すぎると抜き取る時に隣の根を痛める原因になります。

《病気の予防》

リーキが病気になる主な原因は、日当たりが悪い、株元の葉が込み合って風通しが悪い、畑の排水性が悪く多湿になっていることが多いです。

病気の発生を予防するためには、多湿を避ける、日当たりのよい場所で育てる、適正な株間の確保を行うなどし、水はけの良い土壌作りを心掛けましょう。